

6年1組

高く 長く 美しく飛ばしたい わたしの竹とんぼ ～2年目の追究～



5年生3月。いつものように竹とんぼを作っていたAさんが、「先生、竹とんぼって6年生になっても作っていいの」と話しかけてきました。私が「Aさんが作りたかったらつくってもいいよ」と言うと、「そっか。じゃあ6年生になっても作る」と笑顔で自分の席に戻っていきました。それを隣で聞いていたSさんは「先生、竹とんぼってこんなに長く続くと思ってた?」と聞いてきました。「こんなに長く続くとは思ってなかったなあ」と答えるとSさんは「たかが竹とんぼじゃなかったね」と言って笑っていました。6年生になり、今も子どもたちは竹とんぼへの追究を続けています。その追究が向かっている場所はどこなのか。子どもと一緒に見つめていきたいと思っています。

☆つくりたいのは「ルール」じゃないのかもしれない☆

「キャッチ竹とんぼルール作り」のきっかけは、昨年度3月に行った5年生最後の竹とんぼ記録会でした。竹とんぼ協会高橋先生とのZOOM交流の中で、大人の大会記録とは別に、子どもの大会を行い、公式記録として残していきたいという話を聞いた子どもたちは、自分たちが行った記録会での滞空時間や距離を測り、その記録をまとめていきました。そんな中、出てきたのが、「キャッチ竹とんぼの記録をどうしたらよいか」ということでした。ルールがはっきりしていなかったのです。高橋先生に相談したところ、子どもたちでルールを作ってよいとのお返事をいただき、そこから子どもたちのキャッチ竹とんぼのルール作りが始まりました。自分たちでキャッチ竹とんぼを楽しむ中で、様々なルールが出てきました。しかし、それらを一つにまとめるのはとても難しいことが分かってきました。なぜならば、例えば時間を制限して何回できるかというルールと、時間無制限で何回できるかというルールでは、「キャッチ竹とんぼそのものの楽しみ方」がまるで違うからです。それぞれが作ったルールは、それぞれの良さがありました。その時は、私も子どもたちも、「統一したルールで、楽しさと公平さを大事にしよう」と考えていました。その考えはとても大事だと思っていましたし、ルールをつくるというのはそういうものだと思っていました。しかし、ある日、それは本当に今自分たちがやりたい事なのかと改めて考えたくなる出来事がありました。



ランチルームでキャッチ竹とんぼを楽しんでいる子どもたちを見ていたとき、窓の外に、グラウンドで竹とんぼを飛ばしている子どもたちに目が留まりました。どうやらランチルームには人がいっぱいいて、外に活動場所を求めに行っていたようでした。その様子をしばらく眺めていると、キャッチ竹とんぼは全くできていませんでした。風が強くて、竹とんぼがキャッチできないのです。それでもなんだか私には子どもたちがとても楽しそうに見えました。「もしかしてー」と思い、その場にいた子どもたちと、距離を離してキャッチ竹とんぼをしてみました。すると先程までやっていたものとは、また違う楽しさを感じました。それは、先程までやっていたキャッチ竹とんぼが「コントロールを重視した、回数が増えていくことに楽しさを感じるもの」であるのに対し、距離を開けたものは、自分が飛ばした竹とんぼを誰かがキャッチしてくれるという楽しさを感じるもの」だったのです。それは私にとって、今取り組んでいるルールづくりへの見方が変わった瞬間でもありました。



その日のSさんと、Tさんの振り返りにはこんなことが書かれていました。

外でやってみて、「できないよ」って思ったけど、それが取れた時にはすごくうれしかった。
外は風が吹いていて、続けられなかった。けど距離は出た。だから距離で競うのはいいのかなあと思った。

それは私の感じたものと近いものでした。

私は「子どもたちは、キャッチ竹とんぼのルールをつくりたいんじゃないかと、竹とんぼの魅力や楽しさを形にしたいのではないだろうか。」と考え始めていました。

形というのは、競技、あるいはゲーム、遊びといったものです。「形」を作っていく過程で、その楽しさや魅力を活かすために、ルールが必要になってくるのではないだろうかと思い、翌日、子どもたちに話してみました。その日から、子どもたちの活動が変わってきたように思います。「公式ルールをつくる」ということに知らず知らずのうちに縛られていた私。それはある意味では子どもの追究の妨げになっていたのかもしれませんが。Hさんは、「キャッチだけじゃなくて、他の種目ってないかな。キャッチ以外にも」といろんな可能性を考えています。KさんやHさんは、竹とんぼを飛ばしてその間に何回自分が回転してキャッチすることができるか、何回拍手してキャッチすることができるかという「一人キャッチ竹とんぼ」の楽しさを味わっていました。子どもたちが楽しいと感じる中に本当の魅力があるのだと感じています。

☆追究の時間 5分間の出来事～回る竹とんぼから感じるエネルギー～☆

追究の時間、SさんとT君が竹とんぼを持って窓のそばに行きました。するとSさんの持っていた竹とんぼが風を受けて回り始めます。T君が「こっちのほうがよくない？」と児童会室前の廊下に駆け出しました。「やっぱり、やっぱりやっぱり」と言いながら、高速で回転する竹とんぼをじっと見つめるS君。左手でそっと軸を握り、右手は竹とんぼ全体のバランスをとるために軸の下に添えています。自然と出来上がったこの手の状態が、一番よく回転することを彼は知っているのです。そういえば、前に、T君が外に飛ばしに行こうとしたとき、手に握っていた竹とんぼが廊下で吹いた風によって回っていたことを楽しそうに話してくれたことを思い出しました。回っていた時間は5秒ほど。その回転が止まると、再び竹とんぼが回転するように、少し角度を変えました。しばらく回転する竹とんぼを見つめ、今度はその竹とんぼをSさんに渡します。Sさんは「こっちの方が回るんだけど」と、先程自分が回していた竹とんぼよりも回ることを感じながらつぶやきました。T君はもう一つの竹とんぼをもってきて、Sさんの隣に並び、竹とんぼを回転させながら「風向きが変わってない？」と体ごと位置をずらしました。2人ともしばらくその回転を楽しんでいると、Y君が来て、「何してるの？」と声をかけました。「勝手に回ってるの」とSさんが笑顔で答えます。T君は「決してポルターガイストではありません」と笑っています。自然とY君も輪の中に入り、大きく開いた窓の外に向けて竹とんぼを向けました。瞬間、強い風が吹きました。「今めっちゃ来てる」と叫ぶT君。「先生、羽見えない」と今日一番の回転に出会い、興奮を抑えられないT君の姿がありました。「羽、見えない」と何度も叫ぶ隣で、Sさんはずっとゲラゲラ笑っています。「羽が強く回転する」そのことがこの二人にとって、私たちの想像を超えるほどの魅力と楽しさがあったのではないのでしょうか。また、「羽が見えない」というのはどういうことなのか気になりました。それは、「私たちの目が回転しているものをどのように見ているのか」ということを改めて考えさせてくれます。羽をじっと見つめて「まだ見える。あっ、今見えなくなった。」と叫ぶT君と一緒に、回転するものの見え方について語り合いたくなりました。そのうち、今度はT君が高橋先生の竹とんぼをもってきて、同じように風と向かい合わせました。ものすごい勢いで回りながらも途中で止まってしまうその竹とんぼを見たSさんは、「こっちの方が、羽長いからね」とつぶやきました。こうして単に竹とんぼを風と遊ばせているだけに見える行為の中にも、子どもたちの様々な「働きかけ」が行われているのだとわかります。働きかけて働き返されるその中で、少しずつ、T君やSさんのなかに「実感」が積み重ねられていくようでした。そんな風



に2人を見ていた時、T君がつぶやきました。「風力発電になるんじゃないか？」私ができるということが尋ねると、「このまわるスピードでここに発電所つけば発電できるんじゃないか？」と答えました。気が付くといつの間にか大勢の子どもたちが窓に集まっていました。ぐるぐると回り続ける竹とんぼ、追究の時間の終わりごろに起きたこの5分間の中に、竹とんぼに内在する新しい魅力を感じました。